

201420043A

厚生労働科学研究費補助金

新型インフルエンザ等新興・再興感染症研究事業

新興・再興感染症に対する革新的医薬品等開発推進研究事業

新興・再興感染症研究事業の総合的推進に関する研究

平成26年度 総括・分担研究報告書

研究代表者 中山 鋼

平成27(2015)年 3月

新型インフルエンザ等新興・再興感染症研究事業
新興・再興感染症研究事業の総合的推進に関する研究
平成26年度

○研究組織

研究代表者

中山 鋼 国立感染症研究所 企画調整主幹

研究分担者

竹田 誠 国立感染症研究所 ウイルス第三部

宮川 昭二 国立感染症研究所 国際協力室長

研究協力者

大西 真 国立感染症研究所 細菌第一部 部長

研究協力者は五十音順

所属・役職は研究参加当時のもの

目 次

I. 総括研究報告

新興・再興感染症研究事業の総合的推進に関する研究 …………… 1

国立感染症研究所 企画調整主幹 中山 鋼

【資料】

- 1 平成26年度新規採択課題(1年目研究課題)
- 2 平成26年度継続課題(2年目研究課題)
- 3 平成26年度終了課題(3年目研究課題)
- 4 新興・再興感染症研究事業の総合的推進に関する研究
P0 意見一覧表
- 5 新興・再興感染症研究事業の総合的推進に関する研究
- 6 新興・再興感染症研究事業の総合的推進に関する研究
- 7 感染症に関する国際情報収集

厚生労働科学研究費補助金(新型インフルエンザ等新興・再興感染症研究事業新興・再興感染症に対する革新的医薬品等開発推進研究事業)総括研究報告書

平成26年度 新興・再興感染症研究事業の総合的推進に関する研究

研究代表者 中山 鋼 国立感染症研究所 企画調整主幹

研究要旨

厚生労働科学研究費補助金新型インフルエンザ等新興・再興感染症研究事業新興・再興感染症に対する革新的医薬品等開発推進研究事業を総合的に適切かつ円滑で効果的に実施することは、厚生労働省の感染症対策の総合的推進において必須である。本研究は、感染症研究等の専門家による同事業で実施する研究課題についての研究の企画と評価を行うとともに、情報提供や調整を行う。感染症研究の企画・評価に必要な情報収集・調査を実施し、円滑かつ適切な研究評価を行うための研究情報の共有方法について研究し、新型インフルエンザ等新興・再興感染症研究の総合的推進に資するため本研究を実施した。

研究分担者

竹田 誠 (国立感染症研究所)

宮川 昭二 (国立感染症研究所)

厚生労働省においては厚生労働科学研究費補助金:新型インフルエンザ等新興・再興感染症研究事業新興・再興感染症に対する革新的医薬品等開発推進研究事業を中心として行政ニーズに直結した新興・再興感染症研究を推進しており、この研究事業を適切かつ効果的に実施することは感染症対策を行う上で不可欠であり、研究課題の設定、研究者の選考、研究費の配分、研究成果の評価と研究を実施する研究者への支援を適切に行うことが求められている。

A. 研究目的

新興・再興感染症に対する迅速かつ適切な対応は、国民の健康を守る上で重要な施策の一つである。しかし、その対象となる感染症は多岐にわたっており、希少な感染症や今後の発生も想定される新たな感染症もある。このため、今後とも適宜適切な対応を行っていくためには、日頃から対応の基礎となる最新の知見を幅広く集積することが重要であり、その研究体制を確保し、対応の決定に科学的根拠を提供するための研究の推進を図っておくことが必要である。

本研究課題では、新興・再興感染症研究に関する情報の収集、新型インフルエンザ等新興・再興感染症研究事業新興・再興感染症に対する革新的医薬品等開発推進研究事業の企画・評価の支援及びこれらを通じて評価者、研究者

等への支援方法等についての検討を行い、その成果を厚生労働省(具体的には、健康局結核感染症課)へ提供することにより、我が国における新興・再興感染症対策の適切な実施に資する研究の推進に寄与することを目的としている。

B. 研究方法

1. 新型インフルエンザ等新興・再興感染症研究事業新興・再興感染症に対する革新的医薬品等開発推進研究事業の企画・評価等の支援

平成26年度に新興・再興感染症に対する革新的医薬品等開発推進研究事業により実施された研究課題に関して、厚生労働本省が行う研究の企画・評価等の支援として、以下1)～4)を行った。

- 1) 感染症研究の専門家による評価組織(以下「評価委員会」という。)との連絡、情報共有等の実施。
- 2) 研究協力者(プログラムオフィサー)等による研究班会議への出席及び研究の進捗状況の把握、ピアレビューの実施と評価委員、厚生労働省との情報共有。
- 3) 新型インフルエンザ等新興・再興感染症研究事業新興・再興感染症に対する革新的医薬品等開発推進研究事業において実施されている研究課題を対象とした研究発表会の実施。
- 4) 研究協力者(プログラムオフィサー(PO))の活動を支援するため開

発していた、Web システム「班会議情報共有システム」を26年度より実施。

2. 新興・再興感染症研究に関する情報収集

国内外の会議への参加、文献収集等による新興・再興感染症研究の企画・評価及び研究の実施に資する関連情報の収集と関係者との情報共有を行った。

3. 評価支援システムの開発

中間・事後評価委員会委員が、成果発表会、中間・事後評価委員会前に予備評価を行うシステムを開発した。(倫理面への配慮)

本研究課題においては、患者等の診療情報や試料、実験動物を用いることはなく、疫学研究に関する指針、臨床研究に関する指針等に関して特に配慮すべき内容は含まないが、研究者の個人情報や研究課題内容に関する情報等を収集することから、その取扱いについては研究者等に不利益を与えないよう十分に配慮する。

C. 研究結果

1. 新型インフルエンザ等新興・再興感染症研究事業新興・再興感染症に対する革新的医薬品等開発推進研究事業の企画・評価等の支援

- (1)平成26年度実施公募課題(※1)
(中間・事後評価)

※1 平成26年度新型インフルエンザ等
新興・再興感染症研究事業新興・再
興感染症に対する革新的医薬品
等開発推進研究事業の研究課題
1年目研究課題 20 課題 【資料 1】
2年目研究課題 25 課題 【資料 2】
3年目研究課題 24 課題 【資料 3】

1) 研究の進捗状況の把握及びピアレビュー

平成26年度に新型インフルエンザ等新興・再興感染症研究事業新興・再興感染症に対する革新的医薬品等開発推進研究事業において研究を行う研究課題の研究代表者に対し、研究班会議開催についての情報提供を依頼し、本研究課題研究代表者及び7名のプログラムオフィサーが分担して出席可能な研究班会議に出席した(※2)。

研究班会議に出席した研究課題は、平成26年度に実施された課題研究69課題のうち34課題である。

※2 研究班会議出席状況等【資料 4】

研究班会議の状況についてはレポートを作成の上、研究評価の参考資料として評価委員、厚生労働省との情報共有を行った。レポートは、中間・事後評価を実施する時期の1ヶ月前までに情報共有するとともに、その後、評価委員会までに開催された研究班会議についても適宜情報共有を行っている。

2) 研究成果の取りまとめ

全研究課題の研究代表者に対して成果概要の作成を依頼し、その取りまとめを行った。

この成果概要は評価委員による評価資料とした。

3) 研究発表会の実施

2年目研究課題及び3年目研究課題を対象に、平成27年1月27日に研究発表会を実施した。

研究発表会は、評価委員によるヒアリング等の場とするとともに、他研究課題の成果を共有する機会として新型インフルエンザ等新興・再興感染症研究事業新興・再興感染症に対する革新的医薬品等開発推進研究事業の全研究課題の研究代表者及び研究分担者にも参加を案内した。

(2) 平成27年度 新規申請課題 (事前評価)

平成27年度研究課題として申請のあった研究課題について、採択の妥当性、研究規模等に関する評価委員による評価を適切かつ円滑に実施することを支援するため、申請課題の事前評価に関する資料の作成とヒアリング等の実施を支援し、その内容を厚生労働省へ提供した。

なお、ヒアリングについては、評価委員の事前の書面での評価を踏まえて、平成27年2月27日に実施した。

2. 新興・再興感染症研究に関する情報収集

平成26年5月にスイス・ジュネーブ

市及びフランス・パリ市を訪問し、世界保健機構(WHO)食品安全・人獣共通感染症部及びパスツール研究所本部を訪問。平成26年7月にベトナム・ホーチミン市を訪問し、ホーチミン・パスツール研究所及びホーチミン熱帯病院を訪問。平成26年8月にはフィリピンマニラ市を訪問し、WHO西日本太平洋地域事務局及びフィリピン保健省熱帯病研究所を訪問した。

アジア地域各国の感染症研究機関での活動について情報収集を行い、感染研との連携協力体制の推進及び我が国の新興再興感染症対策に役立てた。

(分担:宮川昭二【資料5】参照)

また、インフルエンザは新興・再興感染症研究の中でも特に重要な課題である。その中でも、平成25年3月末から中国で発生が報告されているH7N9型亜型取りインフルエンザの人感染事例においては、致死率も高く、さらなる流行が心配されている。対策の必要性や具体的な方法を検討するためには、本ウイルスの性質や、感染症としての特性について研究を進める必要があり、また、国際的な情報を速やかに収集するよう注意を払う必要がある。そこで、平成26年7月27日～8月1日にカナダのモントリオールで開催された国際微生物会議に参加して報告するとともに、国際誌に成果を発表した。

(分担:竹田誠【資料6】参照)

さらに、新興・再興感染症の総合的推進研究において、メコン川流域諸国における特に細菌性腸管感染症の現状を把握するために、人的ネットワーク構築に基づいた国際情報収集を行っており、本年度はタイ、ベトナム、ラオスを訪問し、各国の情報を収集した。また、今年度は台湾も訪問し、在台湾外国人(海外からの出稼ぎ従業者)を原因とする腸チフスアウトブレイクの情報を収集した。同様のアウトブレイクが発生する可能性は国内に存在する。現時点でこれらの国と関連する細菌性腸管感染症に関しては、わが国において対策が必要な案件は稀であると考えられる。しかし、わが国の公衆衛生対策のための感染症対策情報収集のネットワークを構築し、食品、ヒトを原因とする輸入感染症の監視も重要であることが示唆された。(研究協力者:大西真【資料7】参照)

3. 研究の企画・評価等の支援方法の検討

(1) 評価支援システムの開発

これまで開発してきたシステムを積極的に活用し、評価業務の効率化を図った。また、評価入力、集計業務、データ保存等の機能追加を行い、システムの強化及び改善を行った。研究班への助言・支援がさらに適切に行うことができ、質の高いものになると考えられる。

(2)プログラムオフィサーの活動を支援するためのシステムの開発

インターネットを利用して、プログラムオフィサーと厚生労働省担当者とともに班会議の情報を共有できる「班会議情報共有システム」を今年度より実施した。班会議情報をこのシステムを活用して発信することにより、情報共有、情報交換が一段と深まり、各班会議に迅速に対応できるようになった。

D. 考察

新型インフルエンザ等新興・再興感染症研究事業新興・再興感染症に対する革新的医薬品等開発推進研究事業の対象となる感染症は、新型インフルエンザを代表とする発生前から事前対応を求められている感染症、ウイルス性出血熱やSARSのように重篤な輸入感染症として認知されている新興感染症、麻疹や結核、インフルエンザのように社会的な問題として認知されている感染症、多剤耐性菌や成人の百日咳等しばしば報道もなされて認知が高まっている感染症、さらには一般国民にはあまり注目されていないと考えられる感染症等、非常に多岐にわたっている。また、一般的に注目されている感染症に対する研究の推進とその成果の対応への還元が重要であることは言うまでもないが、あまり注目されていないと考えられる感染症であっても、常に基盤的な研究が継続されなければ問題が発生した際の対応が困難であることは明白であり、単に注目の高低

のみで研究の意義や重要性を判断することは難しい。特に近年、重症熱性血小板減少症候群(SFTS)の発生や中国で確認された鳥インフルエンザH7N9の発生・流行、中東諸国におけるMERSに加えて、本年度はエボラ出血熱やデング熱など、緊急の感染症対応も行う必要がある。

限られた予算と当該研究分野における研究者のマンパワーを最大限に活用し、これらの期待に応える効率的・効果的な研究を推進するためには、新興・再興感染症に対する革新的医薬品等開発推進研究事業の企画・評価において、これまで実施されている研究の内容や成果を適切に把握するとともに、研究を取り巻く行政的なニーズ、国際的な研究の状況に基づく企画・評価等を行って効率的に研究を実施することが求められる。また、これらの企画・評価等に基づく研究を適切に実施し、確実な成果が得られるよう研究者を支援することは非常に必要と考えられる。

また、非常に多岐にわたる感染症に関する基礎から応用、自然科学的分野から社会科学的分野にいたる種々の研究課題を目的に応じて適切に評価するためには、数値的な評価指標のみでは困難であり、将来的にはピアレビューも含めた複数の視点から行われることが必要である。

E. 結論

新型インフルエンザ等新興・再興感染

症研究事業新興・再興感染症に対する革新的医薬品等開発推進研究事業の適切かつ円滑な実施を図るため、新興・再興感染症関連研究に関する情報の収集及び当該研究事業において実施される研究の企画・評価及び研究実施の支援を行った。研究発表会の開催やピアレビューなど、評価の充実とともに、疫学的方法論に基づく研究の実施が、研究の質向上に役立つと考えられた。

F. 知的所有権の取得状況

1. 特許取得 なし
2. 実用新案登録 なし
3. その他 なし

平成26年度新興・再興感染症に対する革新的医薬品等開発推進研究事業 採択課題一覧
 <1年目>

合計 20件(一般 20件)

類型	開始	終了	研究課題名	研究代表者	所属施設	職名	評価採 択時期
H26-新興実用 化-一般-001	26	28	地域における結核対策に関する研究	石川 信克	公益財団法人結核予 防会 結核研究所	所長	H26. 3
H26-新興実用 化-一般-002	26	28	多剤耐性結核の分子疫学的解析、 診断・治療法の開発に関する研究	服部 俊夫	東北大学 災害科学 国際研究所	教授	H26. 3
H26-新興実用 化-一般-003	26	28	感染症の診断機能向上のための研究	影山 努	国立感染症研究所 インフルエンザウイ ルス研究センター	室長	H26. 3
H26-新興実用 化-一般-004	26	28	下痢症ウイルスの分子疫学と感染制御 に関する研究	片山 和彦	国立感染症研究所 ウイルス第二部	室長	H26. 3
H26-新興実用 化-一般-005	26	28	薬剤耐性菌サーベイランスとゲノム データの集約・解析に関する研究	黒田 誠	国立感染症研究所 病原体ゲノム解析研 究センター	センター長	H26. 3
H26-新興実用 化-一般-006	26	28	非結核性抗酸菌症の疫学・診断・治療 に関する研究	阿戸 学	国立感染症研究所 免疫部	部長	H26. 3
H26-新興実用 化-一般-007	26	28	国内侵入・流行が危惧される昆虫媒介 性ウイルス感染症に対する総合的対策 の確立に関する研究	高崎 智彦	国立感染症研究所 ウイルス第一部	室長	H26. 3
H26-新興実用 化-一般-008	26	28	迅速な製造が可能な新型インフルエン ザワクチンの開発技術に関する研究	信澤 枝里	国立感染症研究所 インフルエンザウイ ルス研究センター	室長	H26. 3
H26-新興実用 化-一般-009	26	28	原虫・寄生虫に対する監視・制御に関 する研究	野崎 智義	国立感染症研究所 寄生動物部	部長	H26. 3
H26-新興実用 化-一般-010	26	28	酵母様真菌感染症の病原性解明と疫 学・診断法・制御法の研究	宮崎 義継	国立感染症研究所 真菌部	部長	H26. 3
H26-新興実用 化-一般-011	26	28	アジアの感染症担当研究機関とのラボ ラトリーネットワークの促進と共同研 究体制の強化に関する研究	倉根 一郎	国立感染症研究所	副所長	H26. 3
H26-新興実用 化-一般-012	26	28	鶏卵培養不活化全粒子鳥インフルエン ザA (H7N9) ワクチンの免疫原性および 安全性の検討 (医師主導治験)	伊藤 澄信	独立行政法人国立病 院機構本部総合研究 センター	臨床研究統括 部長	H26. 3
H26-新興実用 化-一般-013	26	28	HTLV-1疫学研究及び検査法の標準化に 関する研究	浜口 功	国立感染症研究所 血液・安全性研究部	部長	H26. 3

類型	開始	終了	研究課題名	研究代表者	所属施設	職名	評価採択時期
H26-新興実用化-一般-014	26	28	HTLV-1予防ワクチンの開発に関する研究	長谷川秀樹	国立感染症研究所感染病理部	部長	H26. 3
H26-新興実用化-一般-015	26	28	HTLV-1感染疾患機序における自然免疫の役割解明と疾患リスク予知への応用	神奈木真理	東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科・免疫治療学分野	教授	H26. 3
H26-新興実用化-一般-016	26	28	感染症対策における政策判断のための数理モデル研究基盤の構築と発展	西浦 博	東京大学大学院医学系研究科	准教授	H26. 3
H26-新興実用化-一般-017	26	28	新興・再興感染症に対する画期的な新規ワクチン開発および実用化に関する研究	阿戸 学	国立感染症研究所免疫部	部長	H26. 3
H26-新興実用化-一般-018	26	28	乳幼児に適用可能な安全性と有効性の高いSF-10アジュバントによるインフルエンザ・RSV感染防御免疫誘導	木戸 博	徳島大学疾患酵素学研究センター	特任教授	H26. 3
H26-新興実用化-一般-026	26	28	エボラ出血熱に対する治療薬、診断薬の開発に関する研究	竹内 勤	聖路加国際大学公衆衛生大学院設置基準室	特任教授	H26.11.17 (随意)
H26-新興実用化-一般-027	26	28	エボラ出血熱の制圧を目指した次世代ワクチン等の開発研究	河岡 義裕	東京大学医科学研究所感染・免疫部門ウイルス感染分野	教授	H26.11.17 (随意)

平成26年度新興・再興感染症に対する革新的医薬品等開発推進研究事業 採択課題一覧
 <2年目>

合計 25件 (一般 16件 若手 5件 指定 4件)

類型	開始	終了	研究課題名	研究代表者	所属施設	職名	評価採択時期
H25-新興-一般-001	25	27	インフルエンザワクチン製造種株及び品質管理手法の開発に関する研究	板村 繁之	国立感染症研究所 インフルエンザウイルス研究センター	室長	H26. 1
H25-新興-一般-004	25	27	防疫上緊急対応を要する一類感染症や新興・再興感染症に対する予防・診断・治療法に関する研究	下島 昌幸	国立感染症研究所 ウイルス第一部	室長	H26. 1
H25-新興-一般-005	25	27	若年及び高齢者の結核制御を目指した生体防反応解明と新規予防法・治療法の開発	牧野 正彦	国立感染症研究所 感染制御部	部長	H26. 1
H25-新興-一般-006	25	27	真菌感染症の病態解明及び検査・治療法の確立とサーベイランスに関する研究	河野 茂	長崎大学大学院医歯薬学総合研究科感染免疫学講座	教授	H26. 1
H25-新興-一般-008	25	27	動物由来感染症の対応に関する研究	森川 茂	国立感染症研究所 獣医科学部	部長	H26. 1
H25-新興-一般-009	25	27	小児の肝移植患者におけるワクチン接種の安全性・有効性に関する研究	齋藤 昭彦	新潟大学医歯学系	教授	H26. 1
H25-新興-一般-010	25	27	麻疹並びに風疹排除およびその維持を科学的にサポートするための実験室検査に関する研究	竹田 誠	国立感染症研究所 ウイルス第三部	部長	H26. 1
H25-新興-一般-011	25	27	高病原性鳥インフルエンザの診断・治療に関する国際連携研究	中島 典子 (H26. 4～より前: 河内正治)	国立感染症研究所 感染病理部	室長	H26. 1
H25-新興-一般-012	25	27	不活性ポリオワクチンの有効性・安全性の検証及び国内外で進められている新規腸管ウイルスワクチン開発に関する研究	清水 博之	国立感染症研究所 ウイルス第二部	室長	H26. 1
H25-新興-一般-014	25	27	培養細胞感染系の確立されていない病原体の実験技術の開発と予防診断法に関する研究	石井 孝司	国立感染症ウイルス第二部	室長	H26. 1
H25-新興-一般-015	25	27	迅速・網羅的病原体ゲノム解析法を基盤とした感染症対策ネットワーク構築に関する研究	黒田 誠	国立感染症研究所 病原体ゲノム解析研究センター	センター長	H26. 1
H25-新興-一般-016	25	27	多剤耐性結核に対する新規治療用DNAワクチンの開発・実用化に関する研究	岡田 全司	近畿中央胸部疾患センター 臨床研究センター	客員研究員	H26. 1

類型	開始	終了	研究課題名	研究代表者	所属施設	職名	評価採択時期
H25-新興-一般-017	25	27	ムンプスに関する重大なワクチンギャップを抜本的に解決するための研究	木所 稔	国立感染症研究所ウイルス第三部	室長	H26. 1
H25-新興-一般-018	25	27	新興再興感染症に対する経鼻ワクチンの開発・実用化に関する研究	長谷川秀樹	国立感染症研究所感染病理部	部長	H26. 1
H25-新興-一般-019	25	27	粘膜免疫誘導型新規結核ワクチンの開発	保富 康宏	独立行政法人医薬基盤研究所 霊長類医学科学研究センター	センター長	H26. 1
H25-新興-一般-020	25	27	利便性の高い五種混合ワクチンの開発に向けた研究	森 康子	神戸大学大学院医学研究科	教授	H26. 1
H25-新興-若手-001	25	27	リレンザ純化学合成技術を基盤とした薬剤耐性新型インフルエンザウイルス出現に対応する新規抗ウイルス薬の開発	熊谷 直哉	微生物化学研究会 微生物化学研究所 有機合成研究部	主席研究員	H26. 1
H25-新興-若手-002	25	27	全国を対象とした抗菌薬使用動向調査システムの構築および感染対策防止加算の評価	村木 優一	三重大学医学部附属 病院薬剤部	副薬剤部長	H26. 1
H25-新興-若手-003	25	27	細胞内脂質合成を標的とした抗高病原性ウイルス療法の分子基盤	浦田 秀造	長崎大学熱帯医学研究所 新感染症学分野	助教	H26. 1
H25-新興-若手-004	25	27	2012年に発生した新型ヒトコロナウイルス侵入に備えた診断、治療法確立のための動物モデル開発とSARS-CoVとの鑑別に関する研究	岩田奈織子	国立感染症研究所 感染病理部	主任研究官	H26. 1
H25-新興-若手-005	25	27	自然リンパ球の活性化を介した肺炎球菌ワクチン開発	金城 雄樹	国立感染症研究所 真菌部	室長	H26. 1
H25-新興-指定-003	25	27	Hib、肺炎球菌、ロタウイルス、HPV等ワクチンの有効性、安全性並びにワクチン副反応に関する基礎的・臨床的研究	庵原 俊昭	国立病院機構三重病院	院長	H26. 1
H25-新興-指定-007	25	27	抗毒素の品質管理及び抗毒素を使用した治療法に関する研究	一二三 亨	香川大学医学部附属 病院救命救急センター	助教	H26. 1
H25-新興-指定-009	25	27	SFTSの制圧に向けた総合的研究	倉田 毅	国立感染症研究所 感染病理部	客員研究員	H26. 1
H25-新興-指定-011	25	27	集団予防接種等によるHBV感染拡大の真相究明と被害救済に関する調査	岡 多枝子 (H26. 4より前：山崎喜比古)	日本福祉大学社会福祉学部	准教授	H26. 1

平成26年度新興・再興感染症に対する革新的医薬品等開発推進研究事業 採択課題一覧
 <終了>

合計 24件(一般 18件 若手 5件、4年目指定1件)

類型	開始	終了	研究課題名	研究代表者	所属施設	職名	評価採択時期
H24-新興-一般-001	24	26	重症のインフルエンザによる肺炎・脳症の診断・治療に関する研究:新規診断・治療に関する提案と検証	木戸 博	徳島大学 疾患酵素学研究センター(全国共同利用・共同研究・酸素学研究拠点)	特任教授	H26. 1
H24-新興-一般-002	24	26	重症のインフルエンザによる肺炎・脳症の病態解析・診断・治療に関する研究	森島 恒雄	岡山大学 大学院医歯薬学総合研究科	教授	H26. 1
H24-新興-一般-003	24	26	ワクチンにより予防可能な疾患に対する予防接種の科学的根拠の確立及び対策の向上に関する研究	大石 和徳	国立感染症研究所 感染症疫学センター	センター長	H26. 1
H24-新興-一般-006	24	26	動物由来感染症に対するリスク管理手法に関する研究	吉川 泰弘	千葉科学大学 危機管理学部	副学長・教授	H26. 1
H24-新興-一般-007	24	26	感染症を媒介する節足動物の分布・生息域の変化、感染リスクの把握に関する研究	澤邊 京子	国立感染症研究所 昆虫医科学部	部長	H26. 1
H24-新興-一般-008	24	26	ダニ媒介性細菌感染症の診断・治療体制構築とその基盤となる技術・情報の体系化に関する研究	安藤 秀二	国立感染症研究所 ウイルス第一部	室長	H26. 1
H24-新興-一般-009	24	26	ハンセン病の予防法及び診断・治療法の開発・普及に関する研究	向井 徹	国立感染症研究所 ハンセン病研究センター 感染制御部	室長	H26. 1
H24-新興-一般-010	24	26	新たな薬剤耐性菌の耐性機構の解明及び薬剤耐性菌のサーベイランスに関する研究	柴山 恵吾	国立感染症研究所 細菌第二部	部長	H26. 1
H24-新興-一般-011	24	26	結核の革新的な診断・治療及び対策の強化に関する研究	加藤 誠也	(公財)結核予防会 結核研究所	副所長	H26. 1
H24-新興-一般-012	24	26	重症の腸管出血性大腸菌感染症の病原性因子及び診療の標準化に関する研究	大西 真	国立感染症研究所 細菌第一部	部長	H26. 1
H24-新興-一般-013	24	26	病原体及び毒素の管理システムおよび評価に関する総括的な研究	西條 政幸	国立感染症研究所 ウイルス第一部	部長	H26. 1
H24-新興-若手-015	24	26	侵襲性真菌症例から分離された原因真菌の分子疫学解析と疫学データ化を用いた院内感染対策研究	田辺 公一	国立感染症研究所 真菌部	主任研究官	H26. 1

類型	開始	終了	研究課題名	研究代表者	所属施設	職名	評価採択時期
H24-新興-若手-016	24	26	水疱性口内炎ウイルスを用いたアレナウイルスワクチン感染中和抗体開発に関する基盤研究	谷 英樹	国立感染症研究所 ウイルス第一部	主任研究官	H26. 1
H24-新興-若手-017	24	26	エンベロープウイルス粒子形成の分子基盤の解明と創薬に向けた研究開発	森田 英嗣	弘前大学農学生命科学部分子生命科学科	准教授	H26. 1
H24-新興-若手-018	24	26	HTLV-1感染モデルを用いた抗HTLV-1薬の探索および作用機序の解析	上野 孝治	関西医科大学 医学部	助教	H26. 1
H24-新興-若手-019	24	26	抗HTLV-1ヒト免疫グロブリンによるHTLV-1の革新的感染予防モデルの開発とその有効性の検討	水上 拓郎	国立感染症研究所 血液・安全性研究部	室長	H26. 1
H23-新興-指定-019	23	26	新興・再興感染症研究事業の総合的推進に関する研究	中山 鋼 (H26. 9. 2 宮川昭二より)	国立感染症研究所	企画調整主幹	H26.4
H26-新興実用化-一般-019	26	26	「顧みられない動物由来感染症」の対策及び検査法・治療法の確立に関する研究	森川 茂	国立感染症研究所 獣医学部	部長	H26.9.30 (四次公募)
H26-新興実用化-一般-020	26	26	百日咳の発生実態の解明及び新たな百日咳ワクチンの開発に資する研究	岡田 賢司	福岡歯科大学全身管理・医歯学部門総合医学講座	教授	H26.9.30 (四次公募)
H26-新興実用化-一般-021	26	26	新型インフルエンザに対する治療の標準化法の開発等に関する研究	齋藤 智也	国立保健医療科学院 健康危機管理研究部	上席主任研究官	H26.9.30 (四次公募)
H26-新興実用化-一般-022	26	26	バイオセキュリティの向上に資する基盤的研究	竹内 勤	聖路加国際大学公衆衛生大学院設置基準室	特任教授	H26.9.30 (四次公募)
H26-新興実用化-一般-023	26	26	梅毒の新たな検査手法の開発等に関する研究	大西 真	国立感染症研究所 細菌第一部	部長	H26.9.30 (四次公募)
H26-新興実用化-一般-024	26	26	H5N1沈降インフルエンザワクチンにおける交叉免疫性に関する研究	庵原 俊昭	独立行政法人機構 三重病院	院長	H26.10.23 (五次公募)
H26-新興実用化-一般-025	26	26	海外研究機関等の感染症に関する共同研究および連携強化に関する研究	倉根 一郎	国立感染症研究所	副所長	H26.9.30 (三次再公募)

研究者より、班会議のご案内が事務局に送られてきたもののみ記載。

班会議が複数回開催された課題は、課題ごとに開催順に記載。

課題番号	研究代表者名	所属機関名 役職名	研究課題	総合点 ※1	進捗状況 ※2	連携状況 ※3	評価すべき点 (提出された報告書分をまとめて記載)	検討を要する点 (提出された報告書分をまとめて記載)	その他 (提出された報告書分をまとめて記載)
H26-新興実用化一般-001_1	石川 信克	結核予防会結核研究所 所長	地域における結核対策に関する研究	8	良い	良い	●いずれの分担課題も現実の結核対策に直結している。	●なし。	
H26-新興実用化一般-001_2	石川 信克	公益財団法人結核予防会結核研究所 所長	地域における結核対策に関する研究	7	どちらかというが良い	どちらかというが良い	●行政的に重要な研究。 班員の多くが結核研究所の所員なので、連携はよいと考えられる。 ●対策に必要な側面を包括的・実践的にカバーしている。	●実用化研究としては継続は難しいと考える。 単年度計画であるものの、現時点では未だ計画段階の分担研究が多く、うち、多くは今後の展開も見えないことから、あらかじめ掲げられた成果が得られるのか不明確。 ●成果の論文化による現場・研究への還元をさらに進めていただきたい。	
H26-新興実用化一般-004_1	片山 和彦	国立感染症研究所 ウイルス第二部 室長	下痢症ウイルスの分子疫学と感染制御に関する研究					今後記載予定	
H26-新興実用化一般-004_2	片山 和彦	国立感染症研究所 ウイルス第二部 室長	下痢症ウイルスの分子疫学と感染制御に関する研究	8	どちらかというが良い	どちらかというが良い	●ノロウイルス研究では、ウイルス増殖系の無いことが最大のハードルとなっている。これを克服するために様々な技術の導入をめざして、研究班は多彩な分担研究者で組織されている。リバーズジェネティクス、エンテロイドの導入、計算科学の応用など、各分担研究者は独自の技術で貢献している。臨床分離株と環境水からの分離株の比較・解析は新しい試みである。また、ロタウイルスワクチンのわが国での有効性評価に関するデータも集まりつつある。	●ノロウイルスの増殖、変異と淘汰はヒト体内でのみ起こる。患者の病態、免疫応答、ウイルスの消長等を調べる研究を強化したほうが良いのではないかと。ウイルスの潜伏感染の可能性も視野に入れ、臨床医と連携して取り組んでほしい。	●片山グループにはノロウイルスワクチンの開発が期待されている。しかし、30以上の遺伝子型が存在し、変異も多いノロウイルスのワクチン開発は容易でない。ヒト社会でウイルスが維持される機構等の基盤情報も乏しい。性急な経過を求めず、じっくり支援する必要がある。
H26-新興実用化一般-002_2	服部 俊夫	東北大学 災害科学国際研究所 教授	多剤耐性結核の分子疫学的解析、診断・治療法の開発に関する研究	8	良い	良い	●多剤耐性結核と直結しない分担課題も散見されるが、広い角度からのアプローチとして積極的にとらえたい。宿主の遺伝要因を取り上げている点も注目される。	●なし	
H26-新興実用化一般-002_3	服部 俊夫	東北大学 災害科学国際研究所 教授	多剤耐性結核の分子疫学的解析、診断・治療法の開発に関する研究	8	どちらかというが良い	どちらかというが良い	●未だ成果が出ていない研究が見受けられるが、単年計画の初年度であり、おおむね計画通りと考える。 診断法・治療法開発に関しては、治療反応性転写因子の存在が示唆され、今後の研究が期待される。 国内での先進的な事業の取り組みや海外の保健省への提言など、本研究が施策の反映に関わる課題も見受けられた。 ●多剤耐性結核という外国人結核問題と切り離せない側面をよく抑えている。	●研究の方向性が多岐にわたっており、もう少しタイトルに合わせて課題を絞ることも検討が必要と考える。 実用化研究という観点から、診断法・治療法開発に関する研究課題の強化が望まれる。一部の研究においては、研究計画と一致していないことが懸念される。 ●治療についても検討がなされているが、さらに強化の余地があるようだ。	
H26-新興実用化一般-006_1	阿戸 学	国立感染症研究所 免疫部 部長	非結核抗酸菌の疫学・診断・治療に関する研究	8	良い	良い	●全国実態調査の成果に期待したい。	●上記について、欲を言えば計画立案にあたり疫学専門家が関与すべきであったか。	
H26-新興実用化一般-006_2	阿戸 学	国立感染症研究所 免疫部 部長	非結核性抗酸菌の疫学・診断・治療に関する研究	7	どちらかというが悪い	どちらかというが良い	●非結核性抗酸菌は、数、重篤度ともに結核と比較して勝るとも劣らない病原体であることが分かってきており、その病態解明や診断法・治療法の開発は極めて重要な研究である。積極的に質疑応答・議論がなされている。 ●実態調査の成果に期待したい。できればこれをもとに常設のサーベイランス機構を追究していただきたい。 これまで弱かった臨床(たとえば結核病学会や呼吸器学会の関連部会など)との連携が見えてきたことはよかった。	●初年度と言うこともあり、治療法の開発など計画通り進んでいない領域もあり、次年度以降、診断法の開発も含めてスピードアップすることを期待する。 ●化学療法に関する具体的な研究を強化すべきではないか。	
H26-新興実用化一般-007	高崎 智彦	国立感染症研究所 ウイルス第一部 室長	国内進入・流行が危惧される昆虫媒介性ウイルス感染症に対する総合的対策の確立に関する研究	8	良い	良い	●蚊媒介性感染症の国内侵入が危惧されている状況で、デング熱の診断マニュアル作製や蚊媒介性感染症の迅速診断に焦点を当てた研究は実践的。一方、霊長類動物モデルとして期待されるマレーシアのMHC解析は、非常に重要な基礎研究です。これらがうまく組合わさっており、良い班構成になっています。 ●デング熱の突発的国内流行とも相まって、研究の実践的な意義が問われる研究班だったが、班の構成や研究方針もそれによく応えるものとなっている。	●内閣府主導の"新興再興感染症制御プロジェクト"の枠組みでは、「医薬品等の開発に向け、一年ごとに成果を確認する」進捗ですが、必要以上にそれを意識せず、マレーシアの免疫系の解析のような不可欠な基礎研究を進めて欲しいと思います。研究費が増額されていくべきではないでしょうか。 ●多疾患をカバーしていることや技術革新、学際的アプローチを意欲的に目指していることは評価するが、そのため「総花的」にもみえる。	●"新興再興感染症制御プロジェクト"では、文科省の"感染症研究国際ネットワーク"と連携して活動することとされています。文科省プログラムでは、蚊媒介性感染症の流行地に研究拠点が設定されており、患者や病原体の情報を収集しています。これらの情報を共有することで、研究が発展することに期待します。 ●特になし。

※1 計画通りに進んでいるような状況を10段階で評価(各POの評価の平均で算出)。なお、基準点を6とする。

※2 研究課題が全体的にスケジュール通りに進んでいるかについて4段階(良い、どちらかというが良い、どちらかというが悪い、悪い)で評価(各POの評価の平均で算出)。

※3 研究班内の連携状況について4段階(良い、どちらかというが良い、どちらかというが悪い、悪い)で評価(各POの評価の平均で算出)。

課題番号	研究代表者名	所属機関名 役職名	研究課題名	総合点※1	進捗状況※2	連携状況※3	評価すべき点 (提出された報告書分をまとめて記載)	検討を要する点 (提出された報告書分をまとめて記載)	その他 (提出された報告書分をまとめて記載)
H26-新興実用化一般-011.1	倉根 一郎	国立感染症研究所 副所長	アジアの感染症担当研究機構とのラボラトリーネットワークの促進と共同研究体制の強化に関する研究	6	どちらかというと良い	どちらかというと良い	●アジア諸国の感染症対策の担当機関と感染研が交流し、共通課題の共同研究をとおして実務者レベルから信頼関係を作ること、日常的な意見交換を可能にすること、の意義は疑う余地はありません。診断技術の共有、感染症発生動向の迅速な情報提供など、様々な効果が期待できます。	●研究活動上の強いニーズに基づく共同研究というより、交流のために課題を作った取り組みもあるように思います。それらが、どのように深化し、人間関係の構築に寄与するか、今後を注視したいと思います。	●感染研の本来業務と位置付けて、安定的な予算措置が必要で
H26-新興実用化一般-011.2	倉根 一郎	国立感染症研究所 副所長	アジア感染症担当研究機構とのラボラトリーネットワークの促進と共同研究体制の強化に関する研究	8	どちらかというと良い	良い	●アジア諸国の感染症担当研究機構とのラボラトリーネットワークの促進と共同体制の強化に関する研究として、感染研の各感染症研究診断・病態説明・予防・治療等を担当する分野の研究者が、研究分野の進展状況と相手国との連携上の進捗状況と、連携強化の上での改善点等積極的に進めていることが、相手国別に紹介されて感染研の体制の層の厚さと発展性を感じた。	●感染研による基礎研究、公衆衛生学的活動に直結する病原体・感受性サーベイランス等総合的に日本がイニシアチブをとる部分は多いが、高度危険病原体の病原性診断についての積極的なリーダーシップを発揮する体制整備が感染研の主導で緊急に進めていく具体策も問われると感じた。	●時の流れに連れて、日本からの技術供与と情報提供、感染症対策のシステム構築など、中国、ベトナム等、国レベルでは対等な力を示す中で、日本が主導すべきテーマを明確にし、資材等の消費で重複による無駄の無い活動を可能とするチームワークによる互恵関係を求めていくという意識をはっきりと持つ時代となったと感じた。感染症対策レベルにおいて、東南アジアの国内における都市部と地方とにおける衛生水準格差は厳然として存在しており、この解消に向けた我が国と相手国との集中的な連携の必要性も強く感じた。例として、ベトナム中部の、ハノイとホーチミンとの差、マレーシアの都市部と地方との差などである。
H26-新興実用化一般-013.1	浜口 功	国立感染症研究所 血液安全研究部 部長	HTLV-1疫学研究及び検査方法の標準化に関する研究				PO欠席の為空白欄		
H26-新興実用化一般-013.2	浜口 功	国立感染症研究所 血液安全研究部 部長	HTLV-1疫学研究及び検査法の標準化に関する研究	9	良い	良い	●研究代表者のリーダーシップのもとでHTLV-1の疫学から検査法の標準化まで研究は順調に進んでいる。HTLV-1核酸検査の確立、キット化はHTLV-1母子感染対策において、妊婦への告知、授乳形態選択に際して重要な検査項目となるので、メーカーの参入を促しながら進むことを期待する。HTLV-1感染診断ガイドラインの作成は全国的なHTLV-1母子感染対策の一環としても評価できる。分担研究者に米国公衆衛生学修士・血液疾患の疫学者(岩永正子長崎大学教授)が参加しており、班員の構成は臨床から基礎までバランスはとれている。●国際協調や関係機関との調整のもと、診断キットや標準品の作製等進められている。ガイドラインの策定に向けて、関係者との十分な協議がもたれる予定であり、成果が広く活用されることが期待される。疫学調査についても、すでに倫理委員会にかけると、順調に進められている。	●HTLV-1対策の基本となる全国のHTLV-1感染者数、妊婦での感染者数の推移など日本のHTLV-1感染者の実態調査を定期的、継続的に進めていただきたい。●ガイドラインに関わる関係機関多いことや推進強化には診療報酬も絡むことから、調整は難しいと考えられる。	
H26-新興実用化一般-014	長谷川 秀樹	国立感染症研究所 感染病理部 部長	HTLV-1予防ワクチンの開発に関する研究	7	どちらかというと良い	良い	●ワクチン開発に資する実用化研究として、有望な研究と思われる。	●特になし。	
H26-新興実用化一般-016.1	西浦 博	東京大学大学院医学系研究科 准教授	感染症対策における政策判断のための数理モデル研究基盤の構築と発展	8	どちらかというと良い	どちらかというと良い	●研究代表者の強力なリーダーシップの下で中堅、若手研究者のリクルートも図られ、この分野の将来の人材育成も視野に入れており大いに期待できる。感染症のリアルタイム分析のための必須のデータを明らかにしていただきたい。●これまでの研究でも政策に活かされてきた実績があり、相応の成果が期待できる。	●各研究グループの研究分担者は、数理モデルとなるそれぞれの専門分野の他の研究班(デング熱、エボラ、ポリオ、インフルエンザ、薬剤耐性結核など)への積極的な参加、情報共有が必要である。●極めて行政的な研究であることから、厚労省との綿密な調整が必要となるほか、来年度以降、実用化研究としての位置づけが懸念される。関係する研究班との連携が重要となる(連携方法についても厚労省と調整している)。	
H26-新興実用化一般-016.2	西浦 博	東京大学大学院医学系研究科 准教授	感染症対策における政策判断のための数理モデル研究基盤の構築と発展	9	良い	どちらかというと良い	●厚労省と連携し、エボラ出血熱など政策的課題の大きい感染症に合わせた迅速な対応が図られている。一部の研究ではCDCなど海外の機関と連携し、迅速かつ的確な分析が進められ、世界をリードするような貴重な成果が得られている。特に研究代表者が精力的に取り組んでおり、建設的なディスカッションの場が持たれるなど、若手育成にも戦略的に取り組んでいる。また、今後類似研究との連携を一層図ることにより、最適な治療に係る実行可能な研究成果が期待できる。●エボラ、デング、新抗結核薬といったタイムリーな問題に対応している。	●今回発表のなかった分担研究などにおいても同様の取り組みを期待する。●すでに社内でも意識されているところであるが、実質分野の専門家の関与をさらに強める必要がある。	●日本ではまだ新しい分野の研究班にふさわしく、はつらつとした雰囲気のみなきに感じられた。

※1 計画通りに進んでいるような状況を10段階で評価(各POの評価の平均で算出)。なお、基準点を6とする。

※2 研究課題が全体的にスケジュール通りに進んでいるかについて4段階(良い、どちらかというと良い、どちらかというと悪い、悪い)で評価(各POの評価の平均で算出)。

※3 研究班内の連携状況について4段階(良い、どちらかというと良い、どちらかというと悪い、悪い)で評価(各POの評価の平均で算出)。

課題番号	研究者名	所属機関名	研究課題名	総合点※1	進捗状況※2	連携状況※3	評価すべき点 (提出された報告書分をまとめて記載)	検討を要する点 (提出された報告書分をまとめて記載)	その他 (提出された報告書分をまとめて記載)
H26-新興実用化-一般-017	阿戸 学	国立感染症研究所 免疫部 部長	新興・再興感染症に対する画期的な新規ワクチン開発および実用化に関する研究	7	どちらかというと良い	どちらかというと良い	<ul style="list-style-type: none"> ●インフルエンザ、ノロ、RSV、デングに対する新規ワクチン開発及び実用化に関する研究班である。その中でノロウイルスに関して最も進捗が見られる。 ●研究課題の設定、高い目標そのものは納得できます。弱毒ウイルスの増殖が良い細胞系の作出、新規アジュバントの開発は、ワクチン開発の基盤技術として期待できます。 ●ノロ、デング、インフル、と喫緊の課題に取り組んでおり、成果が待たれる。 	<ul style="list-style-type: none"> ●どのウイルスにも言えることであるがVLP型ワクチンをとりあえず目指すことはこれらのワクチンの内外の状況を考えてやむを得ないが、逆に内外のメーカーがすでに臨床試験まで進んでいることに対して、はたしてどこまで貢献できるのかの危惧がある。 ●ノロウイルスは30-40種のgenotypesへの対応、デングウイルスワクチンはADEの問題、欧米メーカーの2型で抗体価が上がらないというデータ、広範囲のインフルエンザウイルスに対応できる「万能」ワクチンの作成ははたして可能かなど、先行の肺炎球菌ワクチン、ヒトパピローマウイルスワクチンなどの実際の臨床でのデータを解析しながら研究開発を進めていただきたい。ワクチンの基礎研究者がたとえば廣田班などの臨床、疫学班などと共同で班会議を開催し、情報を共有するのは意味あることと考える。 ●感染研究者のみで研究班を組織する合理性は説得力がないと感じます。高い目標と研究進捗状況のギャップが大きく、分担研究者の連携によって研究が加速するよう主任研究者のリーダーシップが求められます。 ●アジュバントやIPS細胞の課題は極めて興味深い、本課題からはやや基礎的過ぎるかも。 	●今後の進捗を期待して見守りたいと思います。
H26-新興実用化-一般-018	木戸 博	徳島大学 疾患酵素学研究中心 センター 特任教授	乳幼児に適用可能な安全性と有効性の高いSF-10アジュバントによるインフルエンザ・RSV感染防御免疫	10	良い	良い	<ul style="list-style-type: none"> ●初年度の取り組みとは思えないくらい当初計画より進んでいる。 ●研究代表者が立派な成果を必ず上げるという強い意気込みを有し、またしっかりとしたストラテジーを持ち、ワクチン開発に向けて十分な成果を出すことが出来ると考えられる。 ●研究代表者が分担研究者や研究協力者の進捗状況を的確に把握している。 ●製薬企業が分担研究者として入っていることから、製品化に向けて建設的重要な議論がなされており、より一層のブラッシュアップがなされている。 	●類似研究との連携	
H26-新興実用化-一般-020	岡田 賢治	福岡歯科大学 全身管理・歯学部 門部 総合医学講座 教授	百日咳の発生実態の解明及び新たな百日咳ワクチンの開発に資する研究	6	どちらかというと悪い	どちらかというと良い	●一課題一課題十分な議論がなされている。	<ul style="list-style-type: none"> ●約半年しか期間のない中ではあるが、計画されている研究については、すべて相応の成果を出すつもりで進めて頂きたい。 ●計画されていた「(4) 効率的かつ効果的なワクチン接種方法に関する評価」などについて取り組みがなされていない。 	
H25-新興実用化-一般-005	牧野 正彦	国立感染症研究所 感染制御部 部長	若年及び高齢者の結核制御を目標とした生体防御反応解明と新規予防法・治療法の開発	9	良い	良い	<ul style="list-style-type: none"> ●治療法・予防法の開発といった実用化につながる重要な研究である。 ●新規薬剤、追加免疫法、新規コンビナントワクチンの開発に向けて着実に進んでいる。 ●成果の獲得に向けて、課題ごとに十分な議論がもたれている。 ●基礎研究としてのレベルは非常に高い。 	<ul style="list-style-type: none"> ●一部のメカニズムの解明研究については、今後の戦略が見えづらい状況のものもあった。 ●意識はされているのだが、対策・医療や現場への還元をさらに打ち出した検討をしていただきたい。 	
H25-新興実用化-一般-006.1	河野 茂	長崎大学 大学院 歯学部 総合研究科 教授	真菌感染症の病態解明及び検査・治療法の確立とサーベイランスに関する研究					PO欠席の為空欄	
H25-新興実用化-一般-006.2	河野 茂	長崎大学 大学院 歯学部 総合研究科 教授	真菌感染症の病態解明及び検査・治療法の確立とサーベイランスに関する研究	8	どちらかというと良い	どちらかというと良い	<ul style="list-style-type: none"> ●これまで十分研究が進んでこなかった真菌感染症に関して、広く、網羅的に取り組んでいることは評価できる。 ●診療ガイドラインや検査・治療法の開発については、進捗に多少の差は見られたが着実に取り組んでおり、成果が期待される。 ●真菌感染症を対象とする研究者が少ない中で、輸入感染症も含めた病態解明の研究と、精度の高い検査方法の改良、最適な治療という研究課題に挙げられているキーワードに即した成果は集積が進んでいると思う。ガイドラインの作成と公表は、皮膚科も含めた一般臨床医への有用なツールとなる。 	<ul style="list-style-type: none"> ●実用化研究としては、対象が広すぎると思われ、今後は検査・治療法の開発に向けて強化することが期待される。 ●報告で示されたように、真菌感染者が多くても無症候である者が多いこと、これらの者の多くは治療により除菌されること等から、全国的なサーベイランスを実施することが容易でないことは理解できるが、感染者で免疫低下者での重症例や、健康者でも症状が軽快一増悪を繰り返す者の把握など、サーベイランスの調査内容を絞った具体的な設計のもとでの調査が必要と考えられ、3年目の成果に示されることが望ましい。3年度に新規抗真菌薬についての成果が盛り込まれることを期待したい。 	●深在性真菌症のガイドラインが既にあるが、これのバージョンアップは重要であり、特に話題となっているトンスラズ等の輸入真菌感染症等の新情報は重要と考えられた。

※1 計画通りに進んでいるような状況を10段階で評価(各POの評価の平均で算出)。なお、基準点を6とする。
 ※2 研究課題が全体的にスケジュール通りに進んでいるかについて4段階(良い、どちらかというと良い、どちらかというと悪い、悪い)で評価(各POの評価の平均で算出)。
 ※3 研究班内の連携状況について4段階(良い、どちらかというと良い、どちらかというと悪い、悪い)で評価(各POの評価の平均で算出)。

課題番号	研究代表者名	所属機関名 役職名	研究課題	総合点 ※1	進捗状況 ※2	連携状況 ※3	評価すべき点 (提出された報告書分をまとめて記載)	検討を要する点 (提出された報告書分をまとめて記載)	その他 (提出された報告書分をまとめて記載)
H25-新興実用化-一般-010.1	竹田 誠	国立感染症研究所 第三部長	麻疹並びに風疹排除およびその維持を科学的にサポートするための実験室検査に関する研究	8	どちらかというと良い	良い	●検査系の開発等着実に進められており、十分な成果が期待される。地衛研等現場での意見を十分反映するなど関係者間での連携が図られている。	●風しんについては、昨年の流行を踏まえ、本年3月に指針が示されるなど、行政的に大きな変化がみられているなか、厚生労働省を始めとする関係機関との連携が今後一層、重要になると考えられる。	
H25-新興実用化-一般-010.2	竹田 誠	国立感染症研究所 第三部長	麻疹並びに風疹排除およびその維持を科学的にサポートするための実験室検査に関する研究				今後記載予定		
H25-新興実用化-一般-011.1	中島 典子 (H26.4.河内正治より変更)	国立感染症研究所 感染病理部 主任研究官	高病原性鳥インフルエンザの診断・治療に関する国際連携研究	7	どちらかというと良い	良い	●ハノイの病院との連携は順調に進められているようである。	●症例の数的限界からみて仕方がないと思われるが、研究対象の「品切れ」感がしないでもない。 ARDSの原因病原体を発見するためのNGS利用という方法論は、可能性としては成り立つが、実用性としては如何なものか？	●なし
H25-新興実用化-一般-011.2	中島 典子 (H26.4.河内正治より変更)	国立感染症研究所 感染病理部 主任研究官	高病原性鳥インフルエンザの診断・治療に関する国際連携研究	8	どちらかというと良い	どちらかというと良い	●ベトナム等を対象とした感染症対策は、国際協力の一環として重要であることはもちろん、国内での発生を考慮しての診断法・治療法の開発は極めて重要な研究である。 海外の病原体等を取り扱うという難しい課題の中で、メカニズム解明、診断法・治療法の開発に向けて着実に取り組まれており、十分な成果が期待される。	●必要に応じて類似研究課題(J-GRID等の海外拠点)との研究連携やベトナム以外との連携も考慮してはどうか。	

※1 計画通りに進んでいるような状況を10段階で評価(各POの評価の平均で算出)。なお、基準点を6とする。

※2 研究課題が全体的にスケジュール通りに進んでいるかについて4段階(良い、どちらかというと良い、どちらかというと悪い、悪い)で評価(各POの評価の平均で算出)。

※3 研究班内の連携状況について4段階(良い、どちらかというと良い、どちらかというと悪い、悪い)で評価(各POの評価の平均で算出)。

課題番号	研究代表者名	所属機関名・役職名	研究課題名	総合点※1	進捗状況※2	連携状況※3	評価すべき点 (提出された報告書分をまとめて記載)	検討を要する点 (提出された報告書分をまとめて記載)	その他 (提出された報告書分をまとめて記載)
H25-新興実用化一般-012	清水博之	国立感染症研究所ウイルス第二部室長	不活性化ポリオワクチンの有効性・安全性の検証及び国内外で進められている新規腸管ウイルスワクチン開発に関する研究	7	どちらかというと良い	どちらかというと良い	●経口ワクチン(OPV)から不活化ワクチン(dIPV, siPV)への過渡期にあつて、IPVの有効性に関わるD抗原量の測定方法と基準値を国際的に標準化する作業は重要です。また、OPV接種経験者へのIPVの追加免疫による抗体上昇を調べるなど、実践的な研究活動は評価できます。 ●精度の高いポリオウイルス検出システムの構築に向け、陰電荷膜とポリオレセプター-結合磁気ビーズによる検体中のポリオウイルス濃縮技術の開発等、努力が認められます。 ●喫緊の行政課題に即した重要な研究課題であり、計画も適切である。	●D抗原量の標準化の作業は、3年間もかけず、短期間に集中して作業し、結論を出すべきではないでしょうか？IPV導入後、わが国のポリオフリーを確認し続けるために、どのようなサーベイランスが最も有効か、十分な議論がされているのでしょうか？EV71やコクサッキーウイルスが臨床検体から検出された事例の報告が積みあがっていますが、今後どのように展開するのが不明です。 ●特になし。	●清水班班会議に片山班が参加していましたが、片山班の課題は重要で活動範囲も広く、時間が限られた中での合同班会議は無理があると感じました。
H25-新興実用化一般-014	石井孝司	国立感染症研究所ウイルス第二部室長	培養細胞感染症の確立されていない病原体の実験技術の開発と予防診断法に関する研究	7	どちらかというと良い	どちらかというと悪い	●患者から病原ウイルスを分離しても、それを増殖させる細胞系が無いと、詳細な研究が難しい。この研究班は、いまだ増殖系が無いノロウイルス、ヒトパピローマウイルス、E型肝炎ウイルスに焦点を当て、様々な技法でウイルス増殖過程の解明や増殖阻害剤スクリーニング・評価のためのアッセイ系の構築を目指しています。個々の分担研究者の努力、用いられている技術、アイデアは優れています。 ●本研究の目的であります「培養系が確立されていない病原ウイルスの実験技術開発」は、我が国において最も感染者が多いかつても過言でないノロウイルスの感染制御においても不可欠な研究課題であります。 ノロウイルスやE型肝炎ウイルスなどの培養系が確立されれば、これらのウイルス感染症の制御に大きく貢献できることは必ずです。これらウイルスの培養系および実験技法の開発研究は、過去30有余年にわたっての世界的な課題でもあります。各研究テーマの進捗に期待するとともに、これらの難問に最新技術を駆使して立ち向かう関係者の努力を大きく評価いたします。	●分担研究者が連携する強みが見えません。個別にブレークスルーを目指す基本的な方針もやむをえませんが、主任研究者のリーダーシップによって、知恵や技術を出し合う努力を強化して欲しいと感じます。特に動物モデルの作出は、担当者に任せきりの感があります。 ●研究班内には多くの個別課題があります。そして、個別の研究課題が対象としている病原体の種類も多岐にわたっています。そんな関係もあって、一見、個別研究班同士の連携が取りにくいようにも思われます。 しかし、検討する技法については共通性が高く、現に、班員同士の技法に関する情報交換や技術交流が大きな成果をあげていると思います。 研究の終盤に向かって、研究担当者が持ち合わせています得意な技法に関して相互利用できる環境を整えることで研究班全体の力を発揮していただきた感じました。	●難しい課題に挑戦し、ネガティブデータも含め貴重な知見を積み上げています。ある程度長い目で成果を見守るべき研究班だと思います。 ●国立感染症研究所が行う研究目的の一つは、地方衛生研究所が担う感染症の制御に関する技術的な支援を行うことでもあります。ノロウイルスをはじめとする培養技法が確立されていないウイルスに関しては、生活環境におけるウイルス汚染の実態調査すらままならない状況です。ましてや生活環境におけるこれらウイルスの制御方法の一つであります消毒剤の選択にも苦慮しています。このような課題解決に対しても、本研究班のご活躍を祈念いたします。
H25-新興実用化一般-016.1	岡田全司	近畿中央胸部疾患センター臨床研究センター室長	多剤耐性結核に対する新規治療用DNAワクチンの開発・実用化に関する研究	7	どちらかというと良い	良い	●治験の準備(企業や規制当局との連携)も並行して行われており、心強い。	●小動物での実験がやや遅れているのではないかと。	
H25-新興実用化一般-016.2	岡田全司	近畿中央胸部疾患センター臨床研究センター室長	多剤耐性結核に対する新規治療用DNAワクチンの開発・実用化に関する研究	9	良い	良い	●治験に向けてさらに一歩前進したと見られる。 ●多剤耐性結核について、治療の経緯と予後等きめ細かい症例の集積と分析が示され、その治療の困難さを打破することを目的とした治療用DNAワクチンの効果をカニクイサルモデルで、投与の方法と効果の確認等豊富なデータの蓄積が行われている。国産DNAワクチンのヒトへの利用に際して、確保すべき安全性や毒性についても着実に情報の蓄積が行われている。DNAワクチンの効果メカニズムは、個体レベルでの免疫力の増強を実験的に示す必要があるがこの点についてもかなり明確な説明が豊富なデータで示された。我が国におけるヒトでの利用までの法的規制等のクリアがスムーズにいけば、公衆衛生的な社会実装が早く行われることの期待は大きい。	●単に多剤耐性結核の治療に限らず、薬剤感受性結核の難治症例の治療や、結核のTailored medicine、他疾患治療への応用などの可能性も切り口に出しておかれたらいいか。 ●ヒトへのワクチン接種という段階で、筋肉内注射による負荷の最小化と最大の免疫治療効果の確保ということについては現実の接種上重要な課題だと思った。	●多剤耐性結核の年間症例が200例程度であることを少ないとみるべきではなく、諸外国特に東南アジアからの輸入例によるリスクの持続・拡大が危惧される中で、多剤耐性結核も含めて、新興・再興感染症の輸出国と輸入国という関係の解消という大枠の中で日本が主導すべき極めて重要な研究である。
H25-新興実用化一般-019	保富康宏	独立行政法人医薬基盤研究所重長類医学研究センター室長	粘膜免疫誘導型新規結核ワクチンの開発	7	どちらかというと良い	どちらかというと良い	●結核の唯一の動物モデルとされるカニクイサルの感染実験ができることは本研究班の強みである。 ●結核菌ワクチン抗原を発現する組換えヒトパピローウイルス2型(rhPIV2)を経鼻接種する戦略は、新規性があり、カニクイサルを用い、BCGプライム、Ag85発現rhPIV2ブースト後、感染させた結核菌の肺内菌数が優位に減少しているデータは、期待を抱かせる。 ●数ある新規結核ワクチンのなかでユニークな戦略のものとして注目される。	●V欠損rhPIV2(増殖能あり)を用い、Ag85ないし他の候補抗原の発現で、カニクイサルの結核菌感染を防御できることを明確に示す実験を優先すべき。HN欠損型は感染が拡大しないので、安全性は高いと思われるが抗原提示能は低下する可能性がある。繰り返す、rhPIV2戦略が、結核菌感染防御において、他のワクチンより優れていることを明確に示してほしい。 ●カニクイサルでの試験成績が待たれる。 安全性や有効性に関わるパラインフルエンザ2型感染状況の把握は、日本でもより臨床試験の行われると想定される国、地域で行うべきではないか？	●特になし。 ●とくになし。
H25-新興実用化一般-020	森康子	神戸大学大学院医学研究科教授	利便性の高い五種混合ワクチン開発に向けた研究	なし	良い	良い	●ヒトヘルペスウイルスに対するワクチン開発をベースに5種混合ワクチンを健闘している。ヒトヘルペスウイルスについて、ワクチン原の作成については、進んでいる。	●昨年度、採択が遅かったため、阪大基礎研・基盤研との連携がこれらからなっている。できるだけスピードアップを図る必要がある。また、4混のワクチンに新たなワクチンを入れることについて、有効性、安全性の面をしっかりと計画的に検証していく必要がある。	
H25-新興実用化一般-002.1	村木優一	三重大学医学部附属病院薬剤部副薬剤部長	全国を対象とした抗菌薬使用動向調査システムの構築および感染対策防止加算の評価	7	どちらかというと良い	どちらかというと良い	●生産量や流通量ではない実際の抗菌薬使用量の動向調査システムの構築であり、全国規模で把握できる仕組みをこれまでの既存のシステムをにらみながら提案していただきたい。 ●中間評価での評価委員からのコメントとして八木班(全国を対象とした抗菌薬使用動向調査システムの構築及び感染防止対策加算の評価)との連携及び全国規模で把握できるシステムを確立できるかの指図に対し、本年度から八木班との連携や研究分担者・協力者の増員がなされ、日本における全ての医療機関における抗菌薬使用量や感染対策の状況を把握できるシステムが議論されるようになった。これにより、院内感染対策や新設された感	●1. 抗菌薬使用動向、抗菌薬の適正使用の解析結果が各病院のICT等を通じて臨床現場に還元されることを期待する。 2. 八木班、柴山班など主に細菌感染に関わる他の厚労省研究事業の研究班との情報共有が必須であり、これらの研究班との合同班会議を年に1回、開催されたいかがでしょう。 ●全国を対象とした抗菌薬使用動向調査システムの構築及び感染防止対策加算の評価をどのように進めていくのが今後の課題となる。	●AUD(Antimicrobial use density)とDOT(Days of therapy)を比較した検討結果も期待したい。

※1 計画通りに進んでいるような状況を10段階で評価(各POの評価の平均で算出)。なお、基準点を6とする。
 ※2 研究課題が全体的にスケジュール通りに進んでいるかについて4段階(良い、どちらかというと良い、どちらかというと悪い、悪い)で評価(各POの評価の平均で算出)。
 ※3 研究班内の連携状況について4段階(良い、どちらかというと良い、どちらかというと悪い、悪い)で評価(各POの評価の平均で算出)。